

# 春燈

3月号

March 2018



主宰の句

安立公彦

月やいま半円に澄む寒の入

繭玉や一門つどふ初披講

けふのことすでに遠しや初日記

意志ありや有り霜柱踏みゆけり

幾たびも仰ぐ夕空春近し



# 渡る鐘花惜しむとはいのち惜しむ

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

敦の人生の中で昭和二十年は死と生への二重の決断の鮮烈な対比の年。戦車狙撃兵の前半と敗戦後何と素早い「春燈」創刊への奮い立ち——。句は晩年のしみじみとした感慨の中の作だが、鐘の哀韻の奥には来し方の交々を想起させる敦の情の世界が霞に見える。己が命の先が臚々に思い見えてこそ覚える、花の命へのいとおしみ。敦はその計り知れない有情の交感を確と楽しんでいる。

中野英伴

鳩の子が一つ遊ぶはわれに似て

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

安住先生にお会いしたことはないが、私の心の師としての存在は大きい。敦は人間本来の孤独を沈痛し、いとおしむ俳人であったと思う。家族や子を詠んだ佳句も多いが、人間のもつ滞在的孤独が、常に意識下にあったのではないだろうか。へ妻がゐて子がゐて孤独いわし雲この句が一番好きである。冒頭の句は、敦晩年の作であるが、下五の「われに似て」が何故か切ない。

久保 久子

# 燈下集



○ 片山博介

初雪や義士討入図奥の間に  
句仲間や障子のうちの一壺天  
ネクタイもとんと締めずに年暮れぬ  
鞍馬行最終電車冬銀河  
冴ゆる夜は鉛筆の芯つんつんに

○ 宮沢治子

十二月八日靴の片減りただならぬ  
粕汁や乗れぬ話に生返事  
釣瓶落し新幹線のすれちがふ  
年詰まる活字大きを選びけり  
降り注ぐ初日双手に受けたまふ（祝・春星賞）

○ 府川昭子

晴は晴雨には雨の石路の花  
うかうかと過ぐる日和や帰り花  
短日やバス待つ間にも伸びる影  
狭庭にて眼白の集ふ新年会  
入るにも出るにも気合寒の風呂

○ 清水美子

つくばひに息ととのへり敷松葉  
極月のしつぽつかんでしまひけり  
歳の瀬やちらりとみする裏の顔  
ボロ市の路地や鎮座の火伏神  
蒼穹や寒林に日矢惜しみなし

○ 永島雅子

三姉妹揃ふ墓前や冬ぬくし  
移りゆく日の筋早し冬紅葉  
合掌の手袋脱ぐや阿弥陀仏(増上寺三句)  
僧の声通る靈廟冬の鴉  
靈廟や散る音も無き冬紅葉

○ 鈴木撫足

綿虫の行く手阻むにあらねども  
母ひとり子ひとり枇杷の花寡黙  
枯律崩し字読めぬ句碑の旧る  
冬至南瓜小鉢に添へし夕餉かな  
抓られし手の謎今も炬燵かな

○ 矢口笑子

はてこれは何の行列十二月  
オルゴールことりと止まる霜夜かな  
速達の赤きスタンプ年詰まる  
正論の時に疎まし竈猫  
こだはりを捨てて円満鏡餅

○ 都丸美陽子

何もせぬひと日ありけり石路の花  
極月の俎板の水ふり切れり  
聖夜かな硝子の靴のペンダント  
高尾残照桜紅葉の散りにけり  
去年今年風の彼方に人住めり

○ 松山三千江

年の瀬や仏蘭西山の風の音  
ドーナツをつくる約束クリスマス  
山茶花の身をかくすと咲きにけり  
長ながと師走の町の貨車の音  
夫との思ひ出ふくらむままに年暮るる

○ 赤羽陽子

気忙しきなかの孤独や十二月  
おはやうと交はず笑顔の息白し  
鳩黒く影絵となりて水暮るる  
木枯の吹き上げてくる団子坂  
夕あかり街の匂ひも師走かな

春燈賞（抄） 25句自選

藤原 若菜

あらたまの吉き日好きこと佳きひとと

褒められていよよ目を伏すかじけ猫

ふたつみつ紅梅ひらく日和かな

走り根を踏む柚道や実朝忌

春めくと古都に小さき蜂蜜屋

のどけしや片方曲がる鬼の角

春惜しむひと日近江の人となり

母と見る昭和の映画うらけし

菜飯田楽帰国の夫に調ふる

春の夜やひとり広ぐる世界地図

石楠花のほほけそめたる人出かな

肌裂きつ古木となんぬ榊若葉

いをの恋蓮の浮葉を乱しけり

切通抜けて此岸の薄暑かな

炎天や我が身を脱けてゆく何か

蛇の尾の暫し残れる葉群かな

鐘涼し階のぼるわらぢ虫

浜木綿や指の間に残る砂

家持たずしがらみ持たずなめくじり

明易や古事記の神の人臭き

秋の日や娘と並ぶ婚約者

稽田に山の陰りの被さり来

訥々と花の名言へり花野守

ふたり目も嫁いでゆきぬ鱒雲

線虫や齡重ぬる御神木

# 当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

ひとすぢの光さしこむ初曆

初鴉日矢うけ姿ととのひぬ

新春の日の斑風の譜池ゆたか

万物の枯れて日輪金色に

白鳥の首しなやかにハートの輪

○ 藤原若菜

老猫を抱いてゐる役煤払

冬ぬくし夫の所望の玄米茶

カルボナーラの卵のころみ夕時雨

ひとり飲む白湯のあまさや松明けぬ

冬の夜や半音下がる猫のこゑ

○ 小山繁子

冬うらら剥けば面照る茹たまご

女性誌の付録重たき師走かな

年惜しむ昨日の灯しすでに過去

言祝ぎの音を加ふる初厨

繭玉のゆれを離さぬ太柱

○ 大文字孝一

また少し時雨れて隠す塔の先

登校の列整然と息白し

冬至南瓜威張りて座せる厨かな

名を残す恋文横丁冬に入る

仕舞湯に来し方思ふ年の暮

○ 川崎真樹子

忘年会彼の世の人の席空けて

手術日の無事の二文字古日記

炎の色の白装束や鍛冶始

待春の島一周のフルマラソン

春近し飛び立ちさうな鳩サブレ

# 春燈の句

安立 公彦選

帰り花しばし夕日をとどめをり

島根 土江 比露

幕参りのみの故郷冬莓

野水仙摘む人もなし漁師村

廃校の鉄棒つたふ冬の雨

瓶底の酒蠹めけり年の暮

酒きらし鰍夫干上がる三日かな

四日はや訪ふ客もなし一人酒

三回忌空しく過ぎし松の内

和草子の店や小春の暖簾ゆれ

三四郎池飛石浮かべ鴨浮かべ

千枚の冬田や風の吹くばかり

冬蝶に誘はれ入る白洲邸

これ以上寄らず寄らせず寒牡丹

沖に早や日の色戻るしぐれかな

神奈川 浅木 ノエ

松が枝の朝の新雪端溪に

枯れ枯れて神宿りたる山牛蒡

渋滞や尾灯に染まる師走道

風の筋確かめぬるや寒鴉

信号を待つ足踏み寒さかな

一寸の土押し上げて霜柱

茶柱に少し安堵や冬ざくら

銀杏落葉家路を急ぐ夕明り

冬満月仰ぎて祈り重ねけり

夕厨ひとつかみ程の菜を洗ふ

消ゆるもの命つぐもの雪女郎

窓二つならびて片や冬ともし

弾初の七線譜楽ひびきけり (祝 田島洋子様)

うどん煮る寒に入る日の徒然に

千葉 海村 禮子

宮城 西川 春子

長野 藤丸 誠旨



# 余言

安立公彦

「古い」が厳然と息づいている。

読初や相思漂ふ『七線譜』

諸戸せつこ

『七線譜』はご承知の通り、田嶋洋子さんの第一句集である。昨年の歳末に上木の運びとなった。

作者はその『七線譜』を読初とした。絶妙の選択である。さらに「相思漂ふ」がこの句集を通しての読後感として、『七線譜』の内容を良く言い止めている。まだ手にされていない人は是非お読み頂きたい句集だ。

埋火や遠くなりたる人の恩

三上 程子

雪の夜は赤い蠟燭灯しけり

萩原 すみ

最近の歳時記の中には、「埋火」を「炭」の傍題として扱っているものもある。確かに炭そのものの利用価値が、一部の商いに限られるようになった現在、季語の有り様の変化は止むを得ない。しかし「埋火」には単なる「物」の状態を超えた言霊とも言うべき内容がある。〈埋火の仄に赤しわが心 龍之介〉などはその一例と言っべきか。

掲出句、作者は手焙用の火鉢を今も愛用して、埋火を掻きながら思いに耽っている。人はそれぞれ「人」の恩を受けて生きていく。肉親を別にしてもその数は決して少なくはない。しかしその恩も、時とともに風化してゆくのもまた現実だ。作者の胸に去来する思いは、全ての人の考えるべきことでもある。そしてこの句の根幹には、その思いの源とも言っべき

诗情溢るる句だ。作者は九十六歳と聞く。現在の燈下集中最高齢である。しかしこの句には、そういう年齢など些かも感じさせないものがある。それは作者の持つ豊かな心である。豊かな诗情と言っても良い。「赤い蠟燭」がよく効いている。メルヘンの世界だ。ご加餐を願うばかり。

着ふくれの病む夫いまも楯とせり

大室恵美子

夫婦の有り様に規範はない。百組の夫婦には百の有り様がある。この句を見ていると、作者の「病む夫」に対する愛情が強く感じられる。

「着ぶくれの病む夫」は病中の夫君の謂である。普通には頼る対象から外される立場にある。しかし作者は、その「病む夫」を今も楯としているのだ。それは防護の手段としての楯ではない。作者のこころの「楯」である。それが「いまも楯とせり」によく表現されている。ご快癒を願うばかりだ。

数へ日の取り落としたるひと日かな 佐橋 敏子

師走、極月、数え日と上げると、慌しさに縛られる思いがする。ことに「数へ日」には慌しさが具体化されている。

この句、晦日大晦日の感懐か。慌しさに取り紛れて、ふとふり返ると、大事な用件がまだ残っている。そういうことは誰にもあり得る。しかし今さら時間を巻き戻すことは出来ない。その思いを作者は「取り落としたる」とする。実に巧みな表現である。

初明り老松姿正しけり 成田なな女

元朝、雲一つない大空にはのぼのぼのと差しくる瑞気。「初明り」のめでたさは言葉に尽くせない。その初明りに浮かぶ「老松」、しかもその松はしっかりと姿を止した老松である。この句を見ている私たちも、その景をしっかりと視角にとどめる。元日のめでたさをよく表わしている句だ。

初鴉日矢うけ姿ととのひぬ 篠原 幸子

初雀、初鴉、初鷄のめでたさは言うまでもない。常に身近にいる鳥であるが、「初」の字を冠すると途端にめでたい鳥に変わる。中でも「初鴉」には神々しさが伴う。それは八咫の鳥や、中国古代説話中の三本足の赤色の鳥の伝説を受け継ぐ鳥ということからも肯われよう。

作者は今、朝日を受けて枝に止まる初鴉を見る。昨日迄はただの鴉である。濁声と馴れなれしさに、むしろその下を避けて通るのが普通だった。しかし今は違う。朝日に染まる初鴉には神々しさが蘇っている。この句、季語の持つ働きの深さをみごとに活かし得ている。

ひとり飲む白湯のあまさや松明けぬ 藤原 若菜

作者は春燈二月号に発表の通り、平成二十四年度の春燈賞を受賞した。かねては編集部にあつて、鈴木直充編集長のもと、毎月の春燈誌の発行に携わっている。編集部は結社においてはその心臓とも言うべき部署に当たるもの。私もその作業は身近に居て日常良く承知している。妥協の許されない厳しい作業である。

この句、そういう背景を知る身にとつては、「白湯のあまさや」がことのほかよく分かる。そういう事情を別にしても、「松明け」という正月行事の終りの、主婦としての安堵の思いが、過不足なく表現されている。この作者の今後を期待する。